
姫鬼夢幻

霧友 亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫鬼夢幻

【Nコード】

N1302BA

【作者名】

霧友 亮

【あらすじ】

連作短編『魔將軍マエバツシ』シリーズ・第2章前編 主を失った魔族の剣士・マエバツシ。人間の姫・アイチとの出会いが、彼の運命を再び揺り動かす。

(前書き)

本作はこれ単独でもお読みいただけますが、『征路陣中』の続編となっておりますので、こちらをお読みいただいた方がよりお楽しみいただけます。

「なるう」作者・聖騎士様よりいただいたテーマに沿って執筆致しました。テーマ詳細はあとがきにてご確認下さい。

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません

「貴方達……これは、私が誰だか知つての狼藉ですかッ!?」

グンタマチバラーギ最大の都市、カナーガ。その貧民街の一角で、少女は声を張り上げる。

それは気高い叫びではあつたが 如何せん、眼前の相手を圧するに、彼女の声は可憐に過ぎた。

「分かつてる分かつてる。オレ達、お嬢ちゃんが誰か、よく知つてるよお？」

六人の男の一人が下卑た笑みと共に、背筋が総毛立つような猫撫で声を発した。周囲の男達が追随するように哄笑する。ただ一人。リーダー格と思われる隻眼の男だけが、その残された右の瞳に鋭い光を宿し、無言で佇んでいた。

「こーんな時間に、街の女の子は一人じゃ歩かねーのよ」

「それがまあ、こんな綺麗な格好してやがる」

「オレ達に恵んでくれるためだろ。え？ 貴族のお嬢ちゃんよお」

びくり、と。少女の肩が震える。年の頃は十五に届くかどうか。

波打つ黄金の長髪に、水宝玉アクアマリンを嵌め込んだかのような深い蒼の瞳。

男たちが言うように、その身に纏った衣服は、庶民のそれに似せてはあるものの、上等な絹の仕立てであると見て取れる。最も、全身から沸き立つ高貴さを持つてすれば、どんな見窄らしい衣服であろうと、贅を尽くしたドレスに劣らぬ輝きを見せるだろう。

男達の非好意的な視線を一身に受け、少女の鮮やかな紅の唇から、「違います」

と、小さな声が漏れた。

恐怖のためと判断し、笑みを深くした男の一人が彼女の肩に手を伸ばす。

その無粋な手が、強く払い除けられた。

「私は貴族の『お嬢ちゃん』ではありませんッ！ 貴族の『女』です！ 弁えなさい、下郎！」

弾かれた手を、男はしばし意外そうな目で眺め。やがて、その瞳が怒りの色に染まった。

「へえ。女、か。良いじゃねえか、『女』だつてんなら、別の楽しみがあるつてもんだ」

伸ばされた手は、強く、強引に。野卑な執拗さでもって、可憐な少女の手首を掴む。

「！ ……離しなさい、今直ぐッ」

「はッ！ 今更泣き言言うのはおせえんだよ、強気な貴族の『女』さんッ！？」

どれだけ気丈に振舞おうと、体格の違いは明らかだ。たった一人すら振り払えるわけもなく、残りの男達もまた少女の元へと近付いてくる。

訪れるであろう絶望の未来に、今度こそはつきりと恐怖し。

少女が、固く目を閉じたその時。

「ガッ」

「……何だ、貴様！」

突然に手首が解放されて、彼女は後ろにたたらを踏む。その背を、武骨だが優しい手が支えた。

「うら若い女一人に男が複数……あまり褒められた状況とも思えないが、どうだ？」

少女の背で、耳慣れぬ声がある。低く重たく、だが決して不快ではない声。

「家」の者ではない。ならば、誰？

少女の胸中の疑問を察したわけでもないだろうが。男達と、己が支える少女に向け、第七の男は名乗りを挙げる。

「俺は、マエバッシ」

そして。ふと、自嘲するように視線を落とした。

「……ただの、マエバツシだ」

「愛と悲しみのアイチ姫と北に封印されし闇の帝王ドーホツカイの復活」(前編)

〔聖騎士様活動報告よりネタ拝借〕

一步。マエバツシと名乗った男は進み出る。

その、一投足を見ただけで。少女は、彼が並ならぬ戦士であることを悟った。

この人。きつと、凄く強い。

そんな少女の内心を知る由もなく。少女を取り巻いていた暴漢たちは、マエバツシを半包围するように広がる。唯のゴロツキにしては、嫌に統制の取れた動きだった。

「殺^{シヤア}ツツ」

どこに隠し持っていたのか。先頭の男が、湾曲した短刀を抜き放つ。そのまま強く踏み込むと、逆袈裟に切り上げるように一撃を放った。

十分に鋭く、闘い慣れたことが知れるムダのない一撃。

だが、それだけだ。

次の瞬間。鮮血と共に、短刀ごと男の両腕が宙を舞う。

抜き放ったことすら知覚させず。マエバツシの右の長剣が閃いたのだ。絶叫を微風程度に受け流し、その巨体が沈み、跳ねる。

剣光一閃。

ただそれだけで、六人いた敵は四人になった。

苦悶の呻きをもらす二人を交互に見やって、男達の動きが止まる。

恐れ、あるいは怯え。だが、戦力の差を考えたのだろう。すぐに半包囲を再構築する。

疑いようもない。訓練された、戦闘集団だ。

マエバツシは、少女の小さな身体を守りつつ、ゆっくりと滑るように横へ移動する。彼を追うように、男達も静かな動きを見せた。それだけで人を殺せそうな殺意。

軽い跳躍音が、重ねて二つ。

残された四人のうちの二人が、左右から同時にマエバツシに肉薄する。それぞれ、右手に先の男と同じ短刀。寸分の狂いもない、メトロノームのように正確な、殺戮のデュエット。迎え撃つ者の一刀では、反撃不可能、回避不可能。

風を切り、闇を切り。愚かな闖入者に二つの短刀が突き刺さる。

その寸前。轟ことう、と。

悲鳴を上げていたのはまたもや暴漢の側だった。

「双剣　！」

そう。マエバツシの得物は「二」刀であった。少女では両の手でも振り回せそうにない剣を、それも二本。一本が大剣の破壊力を有するその両の剣を、この男は一瞬で抜き、同時に振るってみせたのだ。確かに、優れた体格の持ち主ではある。それにしても、規格外の臂力という他に無かった。

吹き飛んだ短刀が、甲高い音を立てて路地の地面に接吻する。己の方に飛んできた一本に、少女は身を竦めた。

「その動き。その双剣。……そして、『マエバツシ』」

ただ一人、趨勢を見守っていた隻眼の男は。静かに呟くと、口角を釣り上げる。

「面白い。十一年振りか　魔將軍」

それは、猛禽を思わせる、捕食者の瞳だった。

身を沈め。夜の闇に溶け込んで。隻眼の男は、他の五人が止まって見える速さで滑り出す。

五人目の男を、瞬きする間もなく血に沈め。一つ肩で息をすると、マエバツシは双剣を構え直す。その視線の先。

「……どこへ消えた？」

残された筈の一人。隻眼の男の姿は、そこには無い。

(……逃げたか?)

マエバツシが、そんな疑問を胸中で呟いた、その刹那。

「危ない！」

「……グッ！」

マエバツシの背に。隻眼の男が隠し持っていた短刀で穴を穿つ。

少女の警句も間に合わない。

「油断したなツ、マエバツシ！ 部下共の仇、ここで取らせてもらう」

「部下……だと」

「そこで転がっているヤツらだけじゃない。貴様に屠られた、数多の勇士達だ。俺の左眼を奪ったその剣で、『五〇〇人斬り』と謳われたのだろう、貴様はツ！」

「ぐ……ッ」

背を浸す灼熱の痛み。刃をねじり込もうとする男の手を、マエバツシは咄嗟に剣を離して抑えこむ。不自然な体勢、彼の臂力と言えど不利は拭えぬ。

「己の悪行を悔いて死ね、マエバツシ！」

闖入者の死、という形で小さな戦闘が終わりを迎えたその時。

「……何ッ」

隻眼の男。その左に、視界はない。即ち、戦士にとって最大の欠陥……死角。それを自覚しているが故に、隻眼の男は己に正しい立ち回りを課してきた。冷静に戦況を見極める、己の「眼」を磨き上げてきたのだ。

その彼の懐に、彼が侮った子猫が飛び込んできている。本来ならば間に合う筈のそのタイミング。だが、死角を乗り越えたという自

信と、敵の戦力を見誤っていた驚愕と屈辱が、隻眼の男の動きを鈍らせた。

伸ばした手を、僅かに掠め。

「てやアツ！」

少女の振り下ろした短刀が、隻眼の男の右腕に突き立った。

倒れ伏す五人の暴漢と、肩で息をしている貴族らしき少女を見やる。これが、マエバツシの久々の闘いの結末だった。

(ここまで、落ちているか……)

たった五人で息が切れる。闇の中で、相手を見失う。

あまりにも惨めな現実。

守るべき者を失い。剣は錆び付き。

誇りは露と、消え去った。

己の有様を顧みて、かつて「魔将軍」と畏怖された男は自嘲する。

マエバツシが主　魔王グンマーを失ってから、十年の月日が流れようとしていた。

あの日。

勇者トチーギが魔王グンマーを討ち取り、魔軍は一瞬で瓦解した。元々、独立心の強い魔族のこと。絶対的な力を持つ王者が失われれば、必然、己を持って魔の主と為そうと試みる。一人、また一人と。かつて「魔王」を名乗り、グンマーの軍門に下った強者が、己を慕う部下と共にグンマーの旗を離れた。

「マエバツシ様！　どうしてあなたは立たないのですか！」

声を荒げる部下。グンマーの旗を守れと。あるいは、マエバツシ

こそが正統な後継の旗を掲げるべきと。

しかし。

『勇者を恨むな』

『違った魔王と勇者の関係が……』

他ならぬグンマーの声が、彼を縛る。己の胸中の複雑な思いを、マエバツシは消化しきれずにいたのだ。思い悩み、闘いから離れたマエバツシから、少しずつ部下が離れていく。

「お前は此処は離れる、マエバツシ」

そして、彼女がグンマーの居城へやってきた。

「ダーム卿……いらしていたのですか」

「ふん。アタシが出張らなけりやどうにもならんだらう、コレは」
周囲を一瞥し。水の双剣士は、蒼の長髪に彩られた美しい顔を歪めた。

水を操る魔女、ダーム姉妹。姉のヤンバ・ダームはマエバツシの双剣の師であり、知る人ぞ知る豪傑であった。その両肩に蛇を生やし、いざ闘いとなれば彼らが切れ味鋭い両の魔剣に変化して、彼女の得物となる。実力はマエバツシを凌ぐとも噂される彼女だが、魔族には珍しく権力闘争を嫌う彼女は早々に隠遁生活に入り、常はグンマーの元にいなかった。

「めんどい。後はお前に任せる」

引き止めるマエバツシにそう言い放ち、彼女が此処を　グンマーの城を去ったのが、まるで昨日のことのようだ。数十年の過去など、魔族にとっては実際、瞬きする時間ではない。

その彼女が、かつてと変わりない凜とした佇まいで、グンマーの城を見渡している。

「話は聞いた。勇者トチーギに、グンマーが討ち取られたそうだな」

「はい……」

「そして、その場にお前はいた。何もできなかった腰抜けだ」

「……」

既に、何度も言われたことだった。グンマーの旗を離れる魔王たちから向けられた蔑みを、生涯忘れることはないだろう。

魔族の国に、身を切る冬の風が吹く。蒼い髪を髑らせるままにしておいて、ヤンバ・ダームはマエバツシに視線を戻した。

「もう、お前にできることは何もない。此処を離れ、一介の魔族として朽ち果てる」

「しかし、私は……」

緑の瞳が、冷たい光を伴ってマエバツシを貫く。

「失せる、マエバツシ！ 誇りを失ったお前など、見るだけで腹立たしいわッ」

稲妻のような言葉がマエバツシを叩きのめし、反論の意志すら奪い去った。

その夜。魔將軍マエバツシは、全てを捨てて、グンマーの城から出奔することとなる。

「……宜しかったのですが、ヤンバ」

闇の中。尖塔の屋根から眼下の世界を見詰める彼女に、静かな声が掛けられる。

彼女を「ヤンバ」と名で呼ぶことを許されたのは、グンマーの他にもう二人……いや、二匹と言うべきか。

「全く、久々に大声なんか出しちまってマア」

右肩の蛇、冷徹なるシンタツ口。左肩の蛇、粗暴なるケンサツク。ヤンバが生まれた時から彼女と共にある、忠実な友である。彼らが人語を解すことを知るのは、ヤンバと、妹のオータキーのみだ。

その華奢な指先で長髪を掻き上げつつ、蒼き美女は言い捨てた。

「ふん。アタシの教え子があんな醜態晒す所は見たくないね。アイツには時間が必要だ。どこへなりと落ちぶれて、世間の常識ってモンを見てくるといい。ま、野垂れ死ぬならそこまでのことさ」

「お優しいですね、貴女は」

「オマエ、本当にアイツには甘いのかな」

「二匹の言葉に、色素の薄い頬が紅に染まる。

「な、な、な……！ 何を言っているんだ、貴様らッ」

「ヤンバ、慌て過ぎです」

「凶星だな、こりゃ」

「き、貴様らあ……斬る！ 斬って我が剣のサビにしてくれるわッ」

「私共が貴女の剣なのですが」

「……ッ！」

完全に沸騰したヤンバを宥めるのに蛇達がどれだけの時間を要したのか……後世、どんな文献を紐解いても、知ることはできない。

そして、マエバツシは全てを失い。「ただのマエバツシ」となった。

「一人、逃げてしまいましたね……」

少女が呟く。未だ座り込んだままの彼女に手を差し伸べつつ、マエバツシはゆっくりと口を開いた。

「……先程は助かった。礼を言う」

「それは、こちらの台詞です……よっ、と」

ようやく身を起こした少女は、マエバツシの手を借りて立ち上がると、強い光を湛えた瞳を傍らの偉丈夫に向ける。

「改めて。本当に助かりました。礼を言います。マエバツシ殿」

「……殿、は不要だ。そんな偉いもんじゃない。ただ、マエバツシ、と」

「分かりました、マエバツシ」

美しい少女だった。まだ幼さを残した面に、匂い立つような色香が混ざりつつある。滲み出る高貴さがその全身を彩り、魔族のマエバツシと言えど思わず息を呑みそうになるほどであった。

「貴方が名乗っていたのですから、私も名乗るべきですが……そうですね、私のことは『アイチ』と」

「では、アイチ」

「はい」

「安全な所まで送って行こう」

「結構です」

せつかくの好意をざつくり斬られ、マエバツシは啞然とする。

どこか、師を思わせる凜とした風情の少女は、強い瞳でマエバツシを見返した。

「私にはまだやることがあるのです。この程度で逃げ帰るわけには参りません！」

この程度、というにはやや重たい状況だった筈だが、意地になつてしまっているのだろう。

さて、どうやって説得したものか。

そう、なかなかの難問に挑もうとしたとき。

ぐーきゆるる。

何とも可愛らしい音に、マエバツシは首を傾げてしまった。

白磁の頬を僅かに紅に染めて、少女は傲然と言い放つ。

「立ち話も何ですし、お食事にしましょう、マエバツシ。お薦めの店はありますかしら？」

トーカー歴二〇二一年。

後に、人からは勇者と讃えられ、魔族からは魔王と崇められることになるマエバツシと。

既に絶世の美しさと謳われ、後にマエバツシの生涯の支えとなるアイチ姫の。

これが、最初の出会いであった。

「魔將軍だとッ」

両肩に剣を突き付けられたままの男。侮蔑の視線で彼を眺めてい

た都市防衛部隊長は、男の言葉に驚愕を顕にした。

「ええ。間違いなく、魔將軍マエバツシです」

隻眼の男。先ほど、マエバツシを追い詰め、アイチによって撃退された、暴漢の生き残りであった。その右腕にはアイチによって大きな傷がつき、しばらくは使い物にならないだろう。おざなりに巻きつけられた包帯がわりの布は、純白には程遠い。

「ここ十年、魔族の侵攻は無かったというのに……」

「偵察、と考えるのが妥当でしょう」

男の言葉に、一瞬天井を仰いだ部隊長は、次の瞬間には眼光鋭く指示を放っている。

「当直の者が三十人いた筈だな？ 他にも手の空いた者を、全員叩き起こせ！」

「はッ」

駆け出す部下たち。

(流石に、無能ではないな……)

そんな様子を見ながら、隻眼の男は胸中で呟く。

「お前も行け。ビワーコ」

「俺みたいな脱走兵を使っていいいんですかな？」

「私はお前が嫌いだ。だが、お前の力量は評価している。『五〇〇人斬りのマエバツシ』が相手なら、こちらも『剣鬼シツガ・ビワーコ』を出すまでの事……どうせなら、相打ちになって後腐れ無く死んでくれ」

「ご期待に沿えるよう努力致しますよ」

彼の方に刃を向けられていた剣が、くるり。柄を向けて手元に突き出された。

「さて、左腕一本でどこまでいけるか」

先ほどは、一本しか得物が無かっただけのこと。

剣鬼シツガ・ビワーコもまた、両剣の雄であった。

その頃。

「流石によく食べますね」

「その台詞、そのままお返しする」

マエバツシの前には、大の大人が三人がかりで食べられるかどうかという料理が並んでいる。無論、彼一人の分である。無謀な注文に目を向いた料理長は、今や店の食材を食い切られはしないかと天を仰いでいた。

まあ、これは彼の体格を考えれば、納得のゆくところではある。

彼の皿から少し離れ。こちらには、大の大人が一人半、という程度の皿。

言うまでもない。アイチが食べるのだ。

その細身の小さな身体のどこに、これだけの食料が入ってゆくの
か。人間の身体というのは不思議なものだ、とマエバツシはややズ
レた感想を抱いた。魔族の少女では、こうはいかない。

「うん。このパン、温かくて美味しいです」

「はは、ウチの店自慢の焼き立てパンだ！ たっぷり食べてくれよ
な、嬢ちゃん」

「嬢ちゃんじゃありません！」

「ごめんごめん、小さな淑女レディ？」

「……もう、それで良いです」

何かを諦めたかのように、だがアイチは眼前のパンに思いつきり
かぶり付いた。彼女の身なりにどこか感づいた様子ながら、笑顔を
浮かべた給仕はそのままの表情で席を去っていく。

気持ちの良い店だった。

「それで、お聞きしたいのですが」

敢えてモグモグとパンを咀嚼しながら、アイチが口を開く。マナ
ー違反ではあるのだが、どこかこの少女には、それを分かっている
楽しんでいる風情があった。

「マエバツシは、どこからいらしたのですか？」

「……北の国から」

「漠然としてますね、何か」

事情がありそうなのは分かっていますけど、と零す。

「もし私で宜しければ、お話を聞かせて頂けませんか？　こうやって、おしの……いえ、旅をしているのも、いろんな人の悩みを聴くためなのです」

まあ、どう見ても貴族のお忍びである。未だ隠しおおせていると信じているらしい少女を傷つけるに忍びなく、マエバツシは苦笑を押し隠した。

幸い、マエバツシの容姿は人間とほとんど変わらない。魔族特有の尖った耳と、頭頂部の小さな角をターバンで隠してしまえば、外見だけでそれと分かる者はいないだろう。身に纏った衣服も、無骨な鎧も、全て人間の手に依る物だ。

どうやって誤魔化そうか、一瞬の逡巡の後。少女の真摯な瞳に、男は重要な部分だけを伏せて話すことにした。

「俺は、とある国の剣士だったんだ。だが、しばらく前に敵の剣士に主を討ち取られてな。国は瓦解し、一人で落ち延びてきたというわけさ」

「へえ……人に歴史ありとは言いますが、思った以上に重い歴史が」

どこか感心したように、少女は二度三度と頷く。

「それで、貴方はどうされるのです？」

「どう、とは？」

「色々あるでしょう？　仇を取るとか、国を再興するとか……えっと……」

三本目の指で事例に困ったのか眉を顰めた少女を、マエバツシは微笑ましく見守った。

「俺は主を守れなかった。それで終わりだ」

「そんな、言い方……」

投げ槍とも取れるマエバツシの言葉に傷ついたのか、アイチは瞳を見開いて絶句する。そんな彼女から目を逸らして、マエバツシは

眼前のパンを小さく千切った。

気不味い沈黙を破ったのは、アイチの静かな声だった。

「それが、貴方の望みですか？」

鶏肉の果肉ソース添えに向けていた食器を下ろし、マエバツシは視線を落とした少女に目を遣る。少女の前に置かれたパンは、既に温もりを失いかけていた。

「全て捨てて、逃げ出して。それが貴方の望み？」

虚飾のない真っ直ぐな言葉が、マエバツシの胸を鋭く貫く。目を逸らしていたつもりはない。だが、「逃げた」と口で言いつつ、「仕方なかった」と思っていたのではないのか。少女の言葉は、男にそんな懷疑を抱かせるに十分な強さを持っていた。

知らぬうち、感情が沸騰する。

「だが、どうしろと言うんだ!？」

「!」

「主は死んだ。国は滅びた! 俺は剣を振るうしか能のない、ただの剣士だ。落ちた皿を元に戻せるか？」

「マエバツシ……」

「……済まない」

年端もいかぬ少女に強い口調でぶつかってしまったことが、マエバツシの矜持に鈍い痛みを与える。自身にそんなモノが残っていたことを、むしろ驚きと共に感じた。

「ゲンマー様は、俺に言った」

ポツリ、と漏れた言葉。少女が居住まいを正す気配がする。

「敵を恨むなど。お前が、彼とどう関係を作るのか楽しみにしている」と

「できたご主人ですね」

「全くだ」

「でも、凄く納得がいきません」

「全くだ」

酒杯を煽る。真紅の涙滴が、苦味を伴って滑り落ちた。

「悩みを聴くため、と言ったな。試しに教えてくれ。君は、俺がどうすべきだと思う？」

「分かりません。難しすぎます、そんなの」

あっさりと切り捨てたアイチに、マエバツシは吹き出しかけた。人間というものも、なかなかどうして剽軽なものだ。

だが、彼が行動に移る前に。「でも」と、アイチは続けた。

「貴方を守るべき者がいないと言うのなら。私がソレになりましよう」

「アイチ……？」

「私を守りなさい、マエバツシ！」

強く輝く水宝玉アクアマリンの瞳に、だがマエバツシは苦笑いで返す。

「生憎だが……俺は主を変える気はない」

「分らない人ですね！」

ばん、と強くテーブルを叩く。

「私が貴方の主になるではありません！ 『貴方も』主になるのです！」

「俺が、主……？」

「臣のみが主を守るなど、そんなバカな話はありません。主もまた、臣を守る！ 臣が主の身を守るなら、主は臣の誇りを守るのです」

その言葉は、アイチが己に言い聞かせる言葉でもあったのだろう。疑いようもなく、彼女は人を「使う」側の人間だ。その覚悟を、この年齢にして身に付けようとしている。

これが、自分には無かったものなのか。

グンマーの後を継げという、かつての部下達の言葉が蘇る。

考えたことが無かったわけではない。彼とて魔族だ。己の力を誇示し、誰かの上に立つ欲求と無縁ではられない。

だが……それを、どこかで拒んでいた。

彼女の小さな体躯に、魔王グンマーと同種の覇気を目にしたように感じて。

「なら、君が俺の部下になるのか？」

敢えて口角を吊り上げ、からかうような言葉を発する。

アイチはツンと澄まして、「それはできません」と再び切り捨てた。

「ですから、私は貴方の友となりましょう。貴方の誇りを守り、貴方に守られる。そんな友に！」

「友、か……」

面白い。

「良いだろう。君と俺は、今この時をもって盟友だ」

既に主はこの世にない。ならば、このお転婆で奇妙な少女に剣を預けるのも一興ではないか。

マエバツシの答えに、少女は歳相応の無邪気な笑みを浮かべた。

そして、すらりと手を上げ、給仕を呼んで。

「お兄さん！ 火酒を一本」

続けた言葉に、男は目を剥いた。

「おい！ 何をッ……」

慌てるマエバツシに、少女はキョトンとした表情。水宝玉アクアマリンのよう

な瞳を瞬きさせる。

「盟約を交わすときには、盃を持ってするものでしょう？」

あながち間違っではないないが……如何せん、この少女の知識は偏ってははいやしまいか。屋敷だか城だかの教育係を呼びつけて問い質したい気分である。

結果、運ばれてきた一本をそのまま飲み干し。むくれた盟友を宥めることに、それなりの時間を必要としたのだった。

「良い加減に機嫌を直してくれ、アイチ」

「怒ってなどいけません。ええ、怒ってなどいけませんと」

むくれたアイチの言葉に、マエバツシは苦笑いを隠そうとはしなかった。

時刻は既に、深夜の入り口に差し掛かりつつある。子供が出歩くにはよろしくない時間帯だった。

「アイチ、そろそろ……」

「それで、今日はどこに泊まるのです？」

「……いや、これからこの街を発つ」

マエバツシの言葉に、少女は目を剥く。

「この時間、獣は寝ている。魔族の危険もだいぶ減った。それなりに己の身を守るなら、この時間に旅をするのが一番なのさ」

無論、言い訳である。魔族の危険も何も、自身が魔族なのだから闇の眷属たる魔族は、日光をあまり好まない。それはマエバツシとて同じことである。

「分かりました。ならば、正門まで送って行きます」

「おいおい……それじゃあ話が」

「何か。文句でも？」

「……いや、お願いしよう」

「素直で結構」

黄金の長髪を波打たせ、先に立って歩き始める少女。その背中を追って、魔族の剣士は歩き出す。小さな歩幅に合わせた歩みで、夜の街をデコボコの影がゆっくりと進む。

カナーガの中でも、特に貧しい者たちが居を構える貧民街。恐らく、こんな場所に足を踏み入れたことは殆どないのだろう。傍らの少女は物珍しげに周囲を見回し、己の様子を男が見ていると知ると、何でも無かったかのように前へ向き直る。

十年間。人間と魔族の、持てる者と持たざる者の、生活を見てきた。

今はまだ、それにどんな意味があるのかは分からない。

だが、自ら任じて「主」たるうとする少女が己の前を行き。周囲の全てを己の血肉としようとして試みるのを見るにつけ。

「参った」

「……何か言いましたか、マエバツシ」

「いいや、何でも」

人間に「負けた」と思ったことは、これで二度目。一度目は無論、あの黄金の髪の勇者。まさか、こんな年端もいかぬ少女に二度目を感じるようになるとは。数奇な運命、という奴だろうか。

己の往く道は未だ分からぬものの。小さく、だが力強い水宝玉アフアマリンの如き煌きが、確かな道標となって導いている。

穏やかな時間は、だが唐突に破られた。

「そこまでだ！ 魔將軍マエバツシ！」

小さく開けられた正門を、くぐり抜けたその先に。松明の灯りを受け、白銀色の甲冑と刃の輝きが闇を切り裂く。

「これは……」

アイチの小さな呟きに、眼前を見据え。マエバツシは、己を包囲せんとする兵士達の中に、見覚えのある顔を一つ見付ける。忘れるには、少し時間の経過が短すぎた。

「なるほど。俺の情報を渡し、軍に拾われたわけか」

腐っても、魔將軍。まして、その身に傷を付けたというのなら、軍としても放つてはられないだろう。

「数に頼るやり方は好きじゃないが……成果主義という奴だ、悪く思っな」

「文句は言わんさ」

掛けられた声に律儀に応答し。マエバツシは覚悟を固めた。

迫り来る兵は、ざっと見渡ただけでも百を数える。「主」を目指し始めた次の場面に、何とも呆気無い幕切れを迎えることになりそうだった。

「覚悟しろ……魔族」

隻眼の男とは別の、兵たちの指揮官と思われる男が手を高く掲げる。弓兵が一斉に矢をつがえる。

「待ちなさいッ」

その時。少女の声が、戦いの場を貫いた。

「ひ、姫……ッ？ 何故、そのような所にッ!？」

指揮官の態度がおかしくなり、兵士たちも困惑を隠せない。

「この人は、暴漢から私を守ってくれた方です!」

「ソレは人ではありませんぞ。魔の眷属だ」

「だから何だと言うのですッ！ 私の敵は、私を傷つける者です。

彼ではありません!」

「姫……我儘をおっしゃいますな」

隻眼の男の静かな声に、少女は激高した。

「何故！ 貴方がこのうとうと其処にいるのです！ 私を襲ったのは

貴方ではありませんかッ」

「これは異なことを仰る。このシツガ・ビワーコは、そのこの魔族が姫を狙っていることを知り、その前に姫を連れ戻そうとしていただけですが」

「どの口が……そんな事をッ……!」

怒りに打ち震える少女の傍らで。マエバツシは、あまりと言えばあまりな事態に困惑を隠せずにいる。

「姫……だと?」

「もしか、魔族。貴様、その方がどなたか知らずに連れ回していた訳ではあるまいな?」

ビワーコの言葉に、魔族の剣士は少女を見やる。

姫と呼ばれた少女は、どこか居心地悪そうに、その水宝玉アクアマリンの瞳で剣士を見上げていた。

「その方は……アイチレーラ・トヨネツタ・ナゴヤー姫だ」

なるほど、とマエバツシは思う。

どうやら、自分には、連合国家グンタマチバラギを治める宗家の一つ、ナゴヤー家の姫君を誘拐した嫌疑まで掛けられてしまったらしい。

状況は最悪に輪を掛けて悪かった。

兵士達は「とんでもない悪行をしでかした魔族」に怒りを隠さず、殺意を募らせている。

これは、いよいよよかも知れんな。

その耳に、少女の小さく、だが力強い声が飛び込んだ。

「私を攫って逃げなさい、マエバツシ！」

「何を……ッ!？」

「この私は人の姫。彼らとて、私がおれば手出しは出来ません」

行け、と。強く見詰める瞳に、マエバツシは喉を詰まらせる。彼

女は、彼らの誤解を事実にしてしまえと言っているのだ。

「俺は、魔族だぞ」

「知っています。先ほど、貴方自身が言っていたではないですか。

主はグンマーだと」

少女の言葉に、マエバツシは己の迂闊を自覚する。先ほどの食堂での会話。うっかりと、主の名を口にしていたのだろう。

「先にも言いました。貴方は私を守ってくれた。私と貴方は盟友です。ならば、私は貴方の誇りのために闘う義務がある」

だが……その後、彼女はと言うのか。彼女を人質に、何処までも何処までも逃げ続ける。そんなことに、その華奢な肉体が耐えよう筈もない。逃げ延びてから解放した所で、彼女が此処にどうやって戻るのか。

「これも良い機会です。この際、広い世界を見てくるのも悪くはな

い

その気丈な言葉に。マエバツシは決意を固めた。

「俺……いえ、私には誇りがあります。『貴女』が取り戻してくれた誇りが」

マエバツシとアイチの様子を眺め、シツガ・ビワーコは舌打ちする。

声は聞こえない。だが、アイチが何やら「悪巧み」をしているらしいことは見て取れた。

これだから、貴族は気に食わない。

戦場で苦しむのは、何時だって彼のような末端だ。魔族に蹂躪され、弄ばれるのも。

彼女は、魔族の恐ろしさを知らない。魔族がもたらした悲哀を知らない。

だから、あんな風にその場に陶醉し、感傷とやらに溺れていられるのだ。

ギリっと。

魔族によって妻子を奪われ、剣鬼と化した男は奥歯を噛み締めた。

「マエバツシ！」

「貴女は此処にいるべきだ」

突然、口調を変えた魔族の剣士に。少女はぎりぎりまで踏み止まって、だが悲鳴になりかけた声で呼び掛ける。

「死ぬ気ですか、マエバツシ！ 貴方は主になるのでしょうかッ」

主。

臣を守り、臣に守られる、彼女が信ずる支配者のカタチ。

「そうですね。私は、主になりたい」

「だったらッ……！」

「私は主になりたい。ならば、私自身の誇りを捨てるなど出来よう筈もない」

「！」
絶句したアイチに、マエバツシは静かな笑顔を向ける。彼自身、己がこれほど穏やかな笑みを形作れるとは知らなかったような表情で。

「だから、私は今は参りましょう。そして、いつか。盟友として貴女の危機に現れましょうぞ」

「……危機が来ることは前提ですか」

「貴女のような元気な方は、自分自身で危機を招きそうですからな」

「……次に会ったら覚えていなさい、マエバツシ！」
「無論」

そして、男は歩み出る。

旋風が、吹き荒れる。前を見据える。

迫るは、人間の勇士が百。

かつての己であれば、物の数ともしない敵。だが、今の己では善戦がやつとだろう。

ここで、終わると言うのなら。せめて、誇り高く逝く。

腰を落とし、双剣を構え。名乗る言葉は、高らかに。

「魔王グンマーがきの臣、魔將軍マエ……ぐ」

「違います」

突然襟元を引っ張られ。マエバツシは後ろに仰け反った。

腰を深く落としていたのが災いしてか、襟を少女の細い指先がガツチリと掴んでいる。

「あ、アイチ姫……？」

名乗りを妨害された怒りよりも、少女の唐突な行動に対する困惑の方が先に立つ。大きな疑問符を漂わせた彼の表情に、少女は明らかな怒気を孕ませ、叫んだ。

「貴方はもう魔王の『臣』ではありませんッ！ 魔王の『後継者』です！ 弁えなさい、バカ！」

マエバツシも。ビワーコも。彼らを取り巻く兵士達も。皆が、呆気にとられた。

魔族の戦士は、己の眼前で腰に手を当て、頬を膨らませる少女をマジマジと見詰める。

やがて。

「なるほど。至言ですな、姫」

ニヤリと、男は笑い。

「分かったなら、やり直しなさい！ 今直ぐ！」

ビシッと、少女は前を指す。

一步、男は前に進み出た。

心地良い闘いの鼓動。曇りなき双刃の煌き。忘れていた高揚が、ゆっくりと全身を浸してゆく。

失った時間は長過ぎた。かつての技も力も今はない。

だが、それでも。託された思いと、守るべき者と。

譲れぬ誇りが、あるのなら。

「魔王グンマーが後継者、『魔王』マエバツシ！ 推して参るッ」

(了)

(後書き)

【予告】

第2章 後編「冥王咆哮」

「この先は取り込み中だ。一見さんはお引取り願おうか」

「双剣使い……見たことがあるぞ。お前、もしかして魔將軍マエバツシの弟子か？」

「見る目がないな。アタシが師匠だよ、勇者」

「そいつは良かった。弟子というのは、師を超えるモノだろう？
ぞつとしないからな」

「なるほど、至言だが 生憎と、アタシの弟子はデキが悪い」

二〇一二年二月 公開予定

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません

というわけで、『魔將軍マエバツシ』シリーズ第2章前編です！
前編としました理由は、文中に書きました真タイトルを御覧下さい。

なお、本作は聖騎士様よりいただいたタイトルを基に執筆しております。
ます。

『姫鬼夢幻』初登場の設定につきましては、同氏の活動報告にコメント
ントされていた皆様のアイデアにつきましても一部借用させていた
だきました。

ヤンバ …… 神村律子様 コメントより (名前・部下名・
最強)

ビワーコ……ごはんライス様 コメントより (名前)

問題がございましたら、当該キャラクターについては削除・変更を

行いますので、お手数ですがご一報下さい。
素敵な設定を考えて下さった皆様に、この場を借りまして御礼申し
上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1302ba/>

姫鬼夢幻

2012年1月3日05時07分発行